

出張報告書

黛 秋津（第4班プロジェクト研究員）

1. 出張期間：2009年8月25日－9月13日

2. 目的地：ブカレスト、ブライラ（ルーマニア）、イスタンブル（トルコ）

3. 調査の目的：帝国の中央と周縁の関係は、帝国に関する様々な問題を考察する上で重要である。特にある帝国が他の帝国、あるいは何がしかの政治勢力と接触する時、その中央＝周縁関係には接触による何らかの影響が見られることが多い。私が主な研究対象にしている18－19世紀のワラキアとモルドヴァの二つの公国は、オスマン帝国・ロシア帝国・ハプスブルク帝国の狭間にあり、この地域を通じて三つの帝国が密に接触をし、やがてフランスやイギリスなどの諸列強もこの地域に進出して、近代西欧世界がロシア・オスマン両帝国を包摂して世界大に拡大する上で大きな役割を果たしたと考えられる。そのようなプロセスを具体的実証的に明らかにする際、オスマン帝国に従属する両公国の、イスタンブルとの宗主・従属関係の変容は、一つの重要な切り口となり得る。今回は、18世紀後半のロシア・ハプスブルク帝国のバルカン進出と、それに伴うオスマン・ワラキアモルドヴァ両公国間の中央＝周縁関係の変容をテーマに、ルーマニアとトルコで資料調査・収集を行った。以下、図書館や文書館利用に関する実用的な情報なども交えながら、今回の出張の概要を報告する。

4. 調査の概要

①ルーマニア。8月26日から9月1日まで滞在したルーマニアでは、首都ブカレストに宿泊し、途中28日に日帰り、ブカレストの北東約150キロの所に位置するドナウ岸の都市ブライラを訪れた。

今回のルーマニアでの調査の最大の目的は、関係する書籍の収集であった。ルーマニアで出版される書籍は、日本はもちろんのこと他の国でもなかなか入手しにくいいため、まずブカレストでは上記テーマに関連する近年刊行された書籍の購入を最優先し、いくつかの書店をまわった。特に人文・社会科学関係の学術書をまとまって扱っているのは、大学広場からほど近いブカレスト大学歴史学部の中にある書店であり、ここで19世紀初頭のルーマニアをめぐるフランス・ロシア外交関係に関する研究書や、同じく19世紀初頭のイギリスの対ルーマニア（特にドナウ下流域）経済政策に関するモノグラフなどを入手することが出来た。その他、近隣にもいくつかの書店や古本屋があり、西欧・ルーマニア政治外交関係史やルーマニア史に関する新刊書を購入できた。しかし、オスマン帝国との関係については期待したような本はなく、空振りに終わった。

今回のルーマニアでのもう一つの目的は、文書館での史料調査であった。今回は滞在が短かったため、次回の本格的な調査のための予備調査ということとなったが、ルーマニア国立文書館にて、Siruni という研究者の個人的な資料のカタログを精査した。H. Dj. Siruni (1890-1973)はトルコ生まれのアルメニア人で、1920年代にルーマニアに移住し、以降ルーマニアのアルメニア人やルーマニア・オスマン関係史に関する著作を発表し続け、ルーマニア東洋学の先駆者の一人とも見なされる人物である。彼は、18世紀末から19世紀初頭にかけて、民間の立場でありながらロシア・オスマン間で仲介役として活躍したアルメニア商人に関する研究を行っており、自分の研究テーマにも大いに関係するものであるため、次回本格的に史料調査を行いたいと考えている。ちなみに国立文書館は、パスポート、申請書、写真の提出で2年間有効の利用許可が下りる。もちろん無料である。以前は、許可申請時に利用する予定のフォンドのリストを提出させたり、ノートパソコンの持ち込みが禁止されていたり、何かと制限があり不便だったが、今ではそうした制限もかなり撤廃され、かなり自由に利用できるようになった。

28日に日帰りで訪れたブライラ (Brăila) は、トルコ語ではイブライル (İbrail) と呼ばれ、ドナウの左岸にありながらオスマン帝国の直轄地とされた、オスマン帝国のワラキア・モルドヴァ両公国支配にとって重要な都市であった。南のシリストラから延びる道はこの町を境にワラキア・モルドヴァへと二つに分かれ、それ故交通の要衝であるこの町を通じてワラキアとモルドヴァの食糧がイスタンブルへと輸送された。オスマン時代の建物はあまり残っていないとは聞いていたが、実際に行ってみて予想以上に何も残っていなかった。1828-29年のロシア・オスマン戦争でこの町は戦場となり、城壁を含むほとんどの建物が焼失したため、現在残っているのは城壁のほんの一部のみであった。その点では残念であったが、収穫もあった。ここを訪れたもう一つの目的は、地方出版社である Istros から出版されている書籍を入手するためであったが、未入手の重要な研究書をここで手に入れることが出来た。この Istros という出版社は、ブライラの歴史博物館に付属する出版社で、ルーマニア各県にある歴史博物館 (あるいは歴史民俗博物館) の中で、自前の出版社を持っているのはここだけである。この出版社からは、黒海やドブルジャ、それにルーマニアの考古学・歴史研究に関するかなりレベルの高い研究書が出版されているが、出版部数がそれほど多くないため、首都のブカレストであってもそう簡単には入手できない。そうした事情もあってブライラの歴史博物館を訪れたのだが、博物館自体は小規模で大して見るべきものはなかったが、博物館脇の小さな本屋で Istros から出版されている書籍のほぼ全てを見ることができた。ここで購入した何冊かのうち最も重要なものは、16・17世紀のオスマン帝国とワラキア・モルドヴァ間の経済関係に関するオスマン語史料集である。時代が18世紀よりは古いが、各史料についてラテン文字の転写とルーマニア語の訳と解説があり、ワラキア・モルドヴァ両公国がイスタンブルに対してどのような義務を負っていたのかを具体的に知ることが出来る。このような成果もあり、ブライラへの日帰り調査は充実したものとなった。

その他ブカレストではブカレスト大学中央図書館を訪れ、上述のテーマに関する雑誌・書

籍の目録を検索した。ここはブカレスト大学の学生でなくとも、お金を払いパスポートを提示すれば利用許可証が発行される。有効期間によって値段が変わり、最長は6カ月だが、研究機関に所属している研究者は身分証明書があれば1年間有効の許可証をくれるそうである。しかし、日本語の身分証明書を提示して、果たしてそのような許可証をくれるのだろうか？

最後に日本への荷物の郵送について触れておこう。今回現地で購入した本は、郵便局から日本へ郵送した。ブカレストには、小包の国際郵便を送れる郵便局は1か所しかなく、海外へ荷物を送りたい人は必ずそこへ行くことになる。本を送る場合、郵便局に用紙があるので、そこに本の著者と題名と出版年を記入する。これが非常に面倒な作業である。なぜこのようなことをするかというと、原則として1950年以前に出版された本は海外に持ち出せないことになっており、それを確認するためのようである。それが終わると、秤を使って本を1.8キロ以内(1包が2キロで、包装紙の分を差し引いて1.8キロ)に収まるように仕分けし、小包の数だけ宛名の紙と税関の内容申告書を書いて、窓口で支払いをする。あとは局員が包装して送ってくれる。料金は、一番安い普通便で約15リラ、日本円にして約500円である。今回は10日足らずで日本に届いた。

このようにルーマニアでの滞在は実質5日半と短いものだったが、その割には多くの成果を上げることが出来たと思う。

②トルコ。9月1日から12日まで滞在したトルコでは、滞在中ずっとイスタンブールに留まり、総理府オスマン古文書館(Başbakanlık Osmanlı Arşivi)にて史料調査を行った。この古文書館は、かつて宮殿や大宰相府に保管されていた約1億5千万ものオスマン語史料を所蔵し、オスマン史研究者にとって最も重要な場所の一つである。これだけの膨大な史料の中から自分のテーマにとって必要なものを短期間で集めることは、分類の複雑さやカタログの不完全さなどもあってなかなか困難であるが、今回は日曜を除いて1日8時間程毎日調査を行い、自分の研究テーマに関係あると思われる史料を出来る限り多く集めてきた。ちなみにこの文書館を利用するには、パスポートの写真のページとトルコへの入国スタンプが押されているページのコピー、それに写真を添えて、必要事項を記入した申請書を提出すれば、通常3ヶ月間有効の許可が下りる。現在多くの帳簿や文書をデジタル化する作業が進んでおり、そうしたものはパソコン上の画面で見ることになる。これは複写を頼む時などは便利だが、現物に触れられないため、文字の色や紙の質、すかしなどの様子がわからないことが欠点である。そして最大の欠点は、パソコンの画面を何時間も見続けなくてはならないため目が疲れることであり、夕方文書館を出るころには相当な目の疲労になる。しかし、貴重な史料を良い状態で長期にわたって保存するためにはやむを得ないことであろう。まだデジタル化されていない史料については現物を受け取れるが、この1年で変化したことは、以前はこうした史料を請求する時には、請求用紙に記入をして提出していたのだが、今回これらの史料の請求をパソコン上から行うようになっていたことである。請求した史料が届くと色が変わって到着を知らせ、返却すると確かに返却したという証拠にまた違う色に変わる。こうしたオンライ

ンでの請求も一見便利だが、1回につき請求出来る制限が厳格に守られ、制限以上に請求することが出来なくなってしまった。以前は、短期間の滞在だと、制限以上に請求しても多少は目をつぶって多くの史料を出してくれたのだが、そうしたトルコの「いいかげんさ（融通ともいえる）」がなくなってしまった。新しいシステムは、便利なようで不便でもある。

今回は帳簿群の中からは、「諸外国台帳（Düvel-i ecnebiye defterleri）」に分類される台帳のうち「ルーマニア命令台帳（Romanya ahkâm defterleri）」を、そして文書群からは、「スルタン宸筆分類（Hatt-ı hümayûn tasnifi）」のうちワラキアとモルドヴァ両国に関するものを主に収集した。いずれも18世紀後半から19世紀初頭の時期のものに限定した。前者は、中央政府からワラキアとモルドヴァの公や両公国に隣接する州総督や県知事に宛てた命令を要約して記録した帳簿で、主に政治・経済に関するオスマン中央政府の対両公国政策全般をうかがい知るために重要な史料である。一方後者は、両公国に関する問題について、大宰相からスルタンへ上奏された上奏文（telhis）もあるが、多くはワラキア・モルドヴァ両公国から中央政府に送られた様々な内容の書簡であり、前者が中央から周縁に送られた史料であるのに対して、後者の多くは、周縁から中央へ送られた史料ということが出来る。両者をうまく対照させることが出来るかどうかは今後史料を読んでいかなないとわからないが、18世紀後半、特に1774年のキュチュク・カイナルジャ条約以降のオスマン・両公国関係の変遷を大まかに追うことが出来るのではないかと期待している。ただ問題は、帳簿に関しては全体の3分の1までしか複写をしてはいけないことになっており、この分量で果たして当該時期の一貫した流れを追うことが出来るのかという心配は残る。

この他に、「親書台帳（Nâme-i hümayûn defterleri）」の中から、必要と思われる箇所を収集した。この台帳は、オスマン帝国のスルタンや大宰相から外国の君主や高官へ、あるいはその逆に諸外国からオスマン帝国へ送られた親書や書簡の要約が記載されており、オスマン帝国の対外関係を知る上で重要な史料である。しかしこれも3分の1の分量しか複写できず、かろうじて対ロシア関係に関するものは網羅的に収集したが、ハプスブルク帝国やイギリス・フランス・プロイセン・スウェーデンなどの国々については一部しか集めることが出来なかった。オスマン帝国の対外関係全般を見渡すには不十分と言わざるを得ないが、規則なのでやむを得ない。

正味10日という短い期間では、なかなか研究テーマに合致するような重要な史料のみを効率よく集めることは難しく、大体のあたりをつけて、関連ありそうな史料を大雑把に複写してきた感がある。文書館での作業はしばしば釣りに例えられるが、本来釣り糸を垂らすべきところに今回は投網を打ったようなものである。費用もそれなりにかかったが、しかしこれが短期間の滞在で出来る限り必要な史料を集める最良の方法であろう。

以上が、今回ルーマニアとトルコで行った調査の概要である。この調査で収集した一次・二次史料に基づいて、今後研究を進めて行くつもりである。